

WASEDA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION OF JAPAN AND TAIWAN

日台稲門会

会報 第24号



発行所：日台稲門会
会報・NL編集委員会
office@nittai-toumon.com

発行人：根本 宏児

2025年度日台稲門会の会報(第24号)をお届けします。

会長 挨拶

ねもと こうじ
根本 宏児



日頃より当会の活動に対して、ご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。さて、昨年台湾では4月3日に花蓮地震が発生し、甚大な被害に見舞われることとなりました。日台稲門会としては、早速幹事会を中心に義援金を募り、同月台北駐日経済文化代表処に20万円を義援金としてお渡し致しました。震災後は、台湾の見習うべき災害復旧力もあり、日台間の人的交流も更に活発になってきていると感じております。

私も10月には台北駐日経済文化代表処主催の国慶節パーティに参加、又11月には台北で開催された台湾校友会総会に出席致しました。同総会には早稲田大学田中総長も臨席、老若男女・日本人・台湾人と共に懇親を深めさせて頂きました。

今年度も日台稲門会として10月の稲門祭参加をはじめとして、有意義な活動の拡充に努め、また早稲田大学台湾留学生団体W.T.S.Aとの交流・支援も強化していきたいと考えております。

今年度も会員・会友の皆様にとっても意義ある稲門会になるよう、皆さまと一緒に努力して参りますので、皆様のご指導・ご支援を引き続きよろしくお願いいたします。

幹事長

おがわ ひでお
小川 英郎



幹事長を拝任いたしました小川英郎です。東日本大震災において台湾から200億円超の義捐金が寄せられました。私は台湾に対して何のお返しができるか、ずっと考えてきました。

私自身は、台湾の文化風習、政治経済に深く興味をもっており、台湾に関しては台北だけでなく、各地域にもたびたび訪問し、地元の人々との交流を通じて、台湾を深く理解してまいりました。そんな中、昨年、台東を訪問した際、運命的とも思われる人物と再会し、戦前から戦後、台湾を愛した日本人を知ることができました。そして人生初めて、監督として映画製作にタッチしました。これからも、日台稲門会の幹事長として全力で台湾と深くかかわってゆきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



映画『陳さんと勝太郎』

昨年度の主な活動

①第28期定期総会

2024年6月8日(土曜日)、早稲田大学大隈記念タワー(26号館)地下1階多目的ホールにおいて第28期定期総会を開催した。2023年度の事業報告、決算報告を行った後、2024年度の事業計画、予算案に関する議案を提示し、会場からは「異議なし」の発言や拍手により賛同され、すべて原案通り承認され、役員人事も発表された。会員32名が参加。

②定例幹事会

8月を除き、原則毎月第二土曜日15時半から開催。事業計画を具体的に遂行すると共に、会員・会友にとって魅力ある有意義な会にするために幹事一同施策に努力した。特に早稲田大学台湾留学生会(W.T.S.A: Waseda Taiwanese Student Association)との交流強化に努めた。

③主な行事

・同じく6月8日(土)に、定期総会に続いて早稲田大学大隈記念タワー(26号館)地下1階多目的ホールで講師 泉裕泰氏(交流協会台北事務所前代表より「賴清徳新政権と日台関係」という演題で講演を頂いた。また質疑応答では、最近の台湾事情について多数の参加者から質問があり、氏は質問一つ一つに丁寧に回答された。引き続き、懇親会を同タワー16階の森の風で実施。

・秋季講演会は10月20日、稲門祭に合わせ7号館307教室で鈴木武生氏(専門言語学 早稲田大学非常勤講師)により、「多言語社会台湾とその人びと」というテーマで講演を頂いた。60名参加。講演内容も台湾原住民の言語にも触れ、

興味深いもので好評だった。その後懇親会（金城庵にて）30名参加。

・春季講演会は2025年3月15日に22号館で早川友久氏（元李登輝秘書、台北稲門会・日台稲門会会長）により「李登輝とわたし」という演題で講演をいただいた。33名参加。その後懇親会（イルデパンにて）30名参加。

(4) 交流活動

台北駐日経済文化代表処

2024年4月22日に根本会長、小椋常任顧問が代表処を訪問し、蔡明耀副代表に花蓮地震義援金20万円を贈呈。10月8日に代表処主催国慶節パーティ（オークラ東京）。根本会長招待出席。

早稲田大学台湾校友会

11月16日に台北喜來登大飯店にて早稲田大学台湾校友会総会が開催され、当会からは根本会長・小川幹事長代行・広谷幹事夫妻・跡部幹事・相京幹事が参加。全体は約150名の参加。遠州稲門会を始め、日本各地稲門会が多数参加。田中総長のご挨拶・誕生日祝い（当日は総長の誕生日）及び応援部によるパフォーマンスもあった（翌17日は観光）

台北稲門会

前日（11月15日）は台北稲門会主催の前夜祭があり三村名誉顧問参加。

三台会日本台湾交流三台会

★2024年4月13日幹事会終了後、三台会と合流し『旧図書館、早慶戦発祥球場』等を見学。夜、中華店『新荘園』にて交流懇親会（早15名、慶5名参加）

★5月16日早慶定期ゴルフ

（習志野CC）早13慶12名参加

★10月8日早慶定期ゴルフ

（泉CC）早慶各13名参加

早稲田大学台湾留学生会(WTSA)

★2024年5月18日に留学生向け就活支援会を開催（A&A Cafeに於いて）。中村拓海氏（ソーシヤライズ代表）と相京幹事が講演。個別相談には小椋常任顧問の後輩及び川村由紀幹事の後輩、計6名が対応。延べ30名の参加。講師を交え、金城庵で懇親会。

★12月20日にWTSA主催忘年会兼副会長選挙結果発表会。北川原幹事・相京幹事が参加。

行政書士稲門会

6月29日に総会後、懇親会へ岩永名誉会長、渡邊副会長、川村淳一副事務局長、相京幹事、広谷幹事が出席。

(5) 広報活動など

「公報」と「ニュースレター」

「公報」第23号は2024年6月8日に発行。（年一回）
「ニュースレター」は一昨年までの毎月発行から2024年度は季刊とした。

(6) 2025年度人事変更

退任幹事長	丸山弘子
新任幹事長	小川英郎
退任監査役	神田正治
新任監査役	小椋和平
新任幹事	跡部靖夫
同	亀ヶ谷政則
同	早川友久

(7) 台北駐日経済文化代表処 人事



李逸洋 新代表

写真：代表処

離任 謝長廷 前代表
着任 李逸洋 新代表
新代表2024年9月9日着任

(8) 総会記念講演

泉裕泰氏

（交流協会台北事務所前代表）

演題 『頼清徳新政権と日台関係』

蔡英文政権下で欧米の台湾に対する態度が大きく変化した。以前は日本と同様に台湾への直接的な外交関与は難しいと考えていたが、中国の「戦狼外交」による圧力が欧州諸国の反発を招き、積極的に台湾を支持する姿勢に変わった。オーストラリアは中国批判をしたことで（オーストラリア産）牛肉やロブスターの輸入禁止措置を受けた。またイギリスも中国大使から侮辱的な発言を受けた。さらに、中国の「一带一路」政策に参加した欧州諸国は期待した利益を得られなかったため、中国への方針を変更する動きが広がった。

台湾の半導体産業の重要性が認識される中、ウクライナ紛争を通じて欧米は中国の台湾政策を警戒するようになった。チエコでは、親台派のヤロスラフ・クベラ前上院議長が中国からの圧力を受け、最終的に死亡したとされる事件が発生。その後、ミロシュ・ビストルチル上院議長が140人の代表団を率いて台湾を訪問し、「I am a Taiwanese」と演説した。さらに、2023年にはチエコのペトル・パヴェル新大統領が蔡英文総統と電話会談を行い、民主主義や人権などの共通の価値観を確認した。

そしてチエコに続き、ポーランド、スロベニア、バルト三国も外交団を台湾に派遣。リトアニアは「台北経済文化代表処」の名称を「台湾代表処」に変更。ア

メリカのペロシ下院議長も2022年に台湾を訪問し、米国の意志で訪台できるようにした。このような動きは、1978年に鄧小平氏が改革開放を唱えた際の「一つの中国原則」とは異なる方向へと進んでいる。日米は、中国の「一つの中国原則」に従うのではなく、「一つの中国政策」として独自の解釈を持つようになった。欧米諸国は台湾の価値を再評価し、「二つの中国」を放棄する可能性を検討し始めている。

台湾の蔡英文総統は「台湾の将来は台湾人が決める」と強調し、頼清徳総統も非平和的手段の放棄はしないと述べている。中国は2027年に台湾を攻撃する可能性があるとされ、習近平氏は「強国の父」として台湾統一の成果を求めている。

日本の外交においては、台湾を勇気づけること、また多国間協力の促進が重要であり、安保、半導体、CPTPP加盟など、日本が台湾のためにできることは多い。また、米国にアジアへの関与を続けるよう説得することも必要である。台湾のアイデンティティを維持することが重要であり、台湾の人々は米国が台湾危機に際して支援すると信じている。台湾問題は今後も国際社会の注目を集め続けるだろう。

（橋本紀明 記）



台湾サイバーセキュリティ2025に参加して

あこへ やすお
跡部 靖夫



臺灣資安大會(CYBERSEC)は、情報セキュリティ(台湾華語)「資料安全」の総合展示会で、今年は4月15日(火)から17日(木)まで、台北南港展覽二館(TaiNEX2)で開催されました。

国内外からの参加者二万人超を集めるこのイベントでは、主催者の出版社「電週文化事業(Theme)」が発行する「臺灣資安年鑑」が配布されました。

初日には、賴清徳総統、美國在台協會(American Institute in Taiwan)台北事務所のRaymond F. Greene所長が来賓として出席し、サイバー防衛強化と協力の重要性を強調していました。

私が参加した中で印象に残ったセッションの内容をいくつか皆様にもご紹介したいと思います。

◎講演「AI時代の網路犯罪趨勢與資安防禦革命」(トレントマイクロ Robert McArdle氏)

犯罪者によるAI技術の悪用事例、倫理フィルター回避、ディープフェイクを用いた犯罪の進化などを取り上げ、犯罪

行為の「生産性」向上の状況を取り上げ、その背景を分析していました。
・犯罪者は楽な生活がしたい…犯罪行為をしなければ、今、普通の業界で普通の仕事をしているはず。

・費用対効果の高い新しい攻撃手法を採用…冒険はせず、既存の攻撃手法よりも確実に費用対効果の高いものだけが採用される。

・進化はさせても大変革は起こさない…犯罪者は短期利益を追求。よほど巨大な組織でなければ研究開発部門を自前では持たない。

◎講演「The Digital Blockade War Game: What we learned at DefCon & Blackhat」(米国防軍大学サイバー&イノベーション政策研究所 Nina Kollars氏 Jay Vogt氏)

さまざまな背景を持った専門家を交えて現状の弱点を分析するゲームシミュレーション(ゲーム化)による「情報通信インフラ防衛」の分析が紹介されました。

台湾の実情を反映した「ゲーム盤」を舞台に、脅威インテリジェンス、データセンター運用、台湾の現地事情、インフラや産業、通信など各分野の専門家などを招き、「諮問委員会」主導でシミュレーションを実施し、弱点を分析し、65個の推奨事項(七割がインフラ、二割が社会インフラの完全停止を防ぐ仕組み、一割がサイバーセキュリティに関するもの)が導き出したとのこと。

平時から米国内外の民間イベントに参加して、知見を深め、交流を進め、技術ノウハウや時には人材を取り込んでいるのだそうです。

◎講演「主權AI: 軸性國家」(中央研究院 資訊科技創新研究中心 李育杰氏)

エヌビディアの黃仁勳(Jensen Huang) CEO曰く、経済的可能性を追求しつつ、自国の文化を保護するためには、どの国も自国の人工知能インフラを必要としている。台湾では、独自の信頼できる生成AIモデルとして「Trustworthy AI Dialogue Engine (TAIDE)」プロジェクトの成果物が活用され、政府機関や学校教育での活用が始まっています。それが、米メタ社の大規模言語モデル(LLM)をベースに、繁体字中国語の生成能力と語彙といった台湾の特色を備えた「TAIDE-LX-7B」「Llama3-TAIDE-LX-8B」です。

独自のLLMを構築したことにより、中国語対応の海外製LLMが抱える問題を解消できるようになりました。

・中国の検閲を受けたオンライン資料の学習や、台湾の資料の学習が不十分なことから生じるAIの「偏見」

・中国製LLMでは中国共産党の意向が反映される一方、武器や爆弾、毒物の製造方法などは回避が容易な「倫理フィルター」(AIに実装された検閲機構)

・中国の国家情報法に基づく企業への中国大陸政府との情報共有の強制(台湾の国家安全情報の漏洩、産業情報や営業機密の盗難など)が起きないことを保証する「安全性」

李氏は、「AI主權」の実現に必要な四つの要素とその関係を次のように述べています。

「模型是一時的, 資料是永久累積的, 算力是必要的投資, 人才要不斷地培養。」

また来年も「打ち上げ」で台湾の友人達との再会し、近況交換と乾杯ができることを願って!

跡部靖夫 (当会新幹事)

会場外観 開会式



『臺灣資安年鑑』



打ち上げ



日台のご縁を紡いで

かめがや まさのり
亀ヶ谷 政則

皆様、こんにちは。2016年に国際教養学部を卒業いたしました亀ヶ谷政則と申します。

卒業後はJ-A三井リースにて約六年半勤め、その後、現在は台湾の玉山銀行東京支店（ESUN Commercial Bank, Tokyo Branch）で財務の仕事に携わっております。

2024年の入会以来、多くの先輩方から温かいご指導とご厚情を賜り、心より感謝申し上げます。このたび幹事の大役を拝命し、大変光栄に思っております。

私の人生の基軸は日本と台湾にあります。高校時代から、日本と台湾の両国に関する仕事ができたらいいなと漠然と思いついておりました。その思いは、大学選びや講義の選択、就職、そして日台稲門会への参加へと自然につながっています。

日本人の父と台湾人の母のもと、台湾で生まれ育ち、台湾の小学校を卒業するまで現地で過ごしました。家庭では日本語とマンダリン、台湾語が飛び交い、幼い頃から日本と台湾の文化が身近にありました。

12歳で日本に移り住んでからは、自分のルーツを意識し直すようになり、日台の歴史や両国のつながりについて学ぶ中で、早稲田の先輩方の存在にも触れました。

念願かなって早稲田に入学後は、台湾に関する講義を積極的に受講し、岩永先生の講義に触れた経験が、日台のつながりを深く理解するきっかけになりました。

日台稲門会は、世代や専門を超えて日台のご縁を育める、かけがえのない場だと感じております。今後は先輩方のお力添えをいただきながら、世代を超えたつながりを大切にしながら、和やかに楽しい交流の場をみなさまと一緒に育んでいければ幸いです。

これから幹事として、皆様とのつながりを大切にしながら、日台稲門会の発展に微力ながら貢献できればと考えております。どうぞよろしく願っています。

亀ヶ谷政則（当会新幹事）



春季講演会（2025・3・15）



（写真：李登輝氏の会より）

講師 早川友久氏 李登輝元大統領秘書

演題

「総統とわたし」—アジアの哲人 李登輝の「一番近く」にいた日本人秘書の8年間—

大学時代に旅行で台湾を訪れたことで、日本と台湾の関係について深く考えるようになった。訪れた総統府のガイドから台湾人は日本の植民地時代を肯定的に捉えていると言われ、自身が受けた教育とは異なることを知って、驚いた。またその方から誘われ、選挙演説会に行ったが、その場の熱気に触れ、台湾に強く惹かれた。帰国後も台湾への関心は冷めず、金美齡氏との交流を通じてさらに台湾文化に親しんだ。語学学習のため台湾に留学し、本格的に国語（華語）を学んだ。李登輝氏が民間人として日本を訪問する際、日本政府の厳しい制約に憤りを感じたが、その後の愛知万博でのノービザ適用には希望を見出した。2009年夏、台北のドラゴンボート大会に参加し、台湾社会に溶け込んでいった。帰国後、再び台湾を訪れ、金氏を通じて李登輝氏と面会した。李氏のカリスマ

性、人間的な魅力、リーダーシップに感銘を受けた。李氏は、日本の若者と話すことを好み、日本台湾関係の未来に期待を寄せていた。彼の理想のリーダー像は徳川吉宗であり、吉宗が常に国家と国民を考え行動する、その姿勢に共感していた。

曾文恵夫人も流暢な日本語を話し、夫婦間では常に日本語で会話していた。ただし、政治的な話題は家庭内に持ち込まないという暗黙のルールがあり、曾夫人が少しでも政治の話をする、李氏はきつくなだめた。李氏は家族を守ることを最優先としていたためだと思う。また彼の日本への思いは強く、日本の若者に対して「自信を持って」と繰り返し語っていた。外交については、相手国の心に残る印象を与えることが重要だと考えていた。2020年、日本が台湾にワクチンを提供したことを感謝していた。台湾人の対外認識として、日本への信頼は高く、将来的に台湾を真に支える国になっ

てほしいとの期待がある。台湾の民主化は李氏の信念と日本時代の教育の影響によるもので、苦難を乗り越えて改革を達成した。台湾人の対米感情は複雑だが、日本に対しては期待が大きく、日本が信頼できる国へと成長することを望んでいた。またいざという時、日本は台湾を助けてくれると多くの台湾人は思っていた。日本と台湾の関係をより強固にするため、日本は意志の強い国になるべきだという李氏の考えに共感した。

Q&A

・米（トランプ政権）に対する対応は？
米台関係安定が一番か？

台湾人は、日本は（中国が）強く言えば折れる国だと考えている。これではだめ。巷ではフェイクニュースがあふれ、中国は常に台湾人に対して疑米感情を持たせよ

うとしている。しかし、少しずつであるが、これに対しても抵抗力が出てきている。ウクライナ停戦についても、中国の見方に否定的である。

・李登輝氏の危機対応力とは？

李登輝氏を見ていると、彼は台湾語、中国語、英語、日本語など数か国語ができるため、言語によって考え方を使い分けているのではないかと思うことがあった。マージャーナルマンかもしれない。

・李氏の日本に対する期待は？

12年間という任期中に選挙制度を通じて、台湾の民主化を達成した。李氏は、これは日本時代の教育のおかげだと思っていた。やるぞと決めたら、どんな苦難があっても最後までやるという信念を持っていたからこそ、達成できたのだと思っている。

早川友久 (李登輝元総統秘書)

台北稲門会会員・当会新幹事

(橋本紀明 記)



(出所: Amazon)



『總統とわたし』
(2020、ウエッジ社)

日台の絆を繋ぐ

おぐら かずみら
小椋 和平

この度新たに監査役を拝命しました小椋です。日台稲門会には2018年に入会し、その後幹事や常任顧問を務めて参りました。

私は1973年早稲田大学高等学院 77年に理工学部機械工学科、79年に大学院理工学研究科を修了し、9年間早稲田に通い早稲田魂を刷り込まれました。

その後三菱商事に入社し中東勤務等を経て1995年に民主化の熱気渦巻く台湾に赴任しました。

その後、故有って2010年迄15年間台湾に駐在することになりましたが、赴任当時の台湾は初の総統直接選挙を翌年に控え台湾人の政治意識やアイデンティティが急速に高まった時期でもありました。96年の総統選挙では国民党の李登輝主席が当選し、李総統は民主化実現へ大きく舵を切っていくことになりました。その後2000年、2008年、2016年と公正な直接選挙で3度の政権交代が実現し、台湾の民主化は確固たるものとなりました。

私は、2006年に日本人会、2009年に台北市日本工商会の理事長を務め、縁を得た李登輝元総統を始め政財界の重鎮との交流は今でも貴重な財産になっています。

思い出深い出来事に日本工商会の「白書」提出があります。当時欧米の商工会は台湾政府に対する提言や要望を纏めた白書を毎年提出し、其れなりの効果を挙げていましたが、日本工商会はこの様に政府に対する直接的な働きかけはしていませんでした。

そこで理事会で白書の提出を決議し交流協会台北事務所の協力を得て、私が理事長を務めていた2009年10月に経済部長宛の白書提出セレモニーを開催しました。

当日は施顔祥経済部長に加え、馬英九総統も臨席され、台湾の5大経済団体の代表も出席してくれ、日台の絆が厚みを増し日本のプレゼンスが一段上がったことを実感し感無量でした。

台湾の思い出は尽きることはありませんが、一方、現地での稲門会活動には全く参加出来なかつたことが心残りでした。

私が3年前迄理事長を務めた(二財)台湾協会も然りですが、日台交流団体では会員の高齢化が進み、日台の絆をどの様に継承していくかが大きな課題になってきています。

日台稲門会は、若手会員の活躍や留学生との交流を通じ日台交流促進に着実に貢献していますので、今後は監査役として本会の健全な運営に助力して参りたいと思っています。 小椋和平 (新監査役)

馬英九総統(中央)、
施顔祥経済部長と



愛犬 ダイと



私と台湾との縁は、旅行で訪れたことから始まりました。



縁に感謝

ひろたに
光紗

初めて台湾に行ったのは2011年の夏のことです。当時住んでいた広島から2泊3日のツアーに友人と一緒に参加しました。送迎車で連れて行ってもらったホテルは外観からして豪華絢爛で、部屋のバルコニーから見える街の風景にはしゃいだことを今でも覚えています。後にこの円山大飯店にまつわるさまざまなストーリーを知り、もっと大切に滞在すればよかったと悔やんだものです。

その数年後、初めてツアーではなく、個人で手配して台湾を訪れました。このときの台湾滞在で初めて台湾高鉄に乗り、台北以外の都市である台南に足を延ばし、廟でお参りをして「熱炒」も体験しました。当時台湾人の先生からオンラインで中文のレッスンを受けており、台北で会おうということになりました。彼女の心のこ

もったおもてなしを受けて、そのときは彼女が特別なんだと思っていましたが、後に彼女が特別だったわけじゃないことが分かりました。

さらにその数年後、初めてバスツアーではなく、台鉄と路線バスに乗って九份に行きました。瑞芳駅で降りてバスに乗り換える計画で確か自強号に乗り込みますが、瑞芳駅までは1時間もかからないはずですが、いつまでたっても瑞芳駅に着きません。車窓の景色が海になり、沖に島が見えたところで通り過ぎたことに気付きました。結局なす術もなく宜蘭まで行きました。嫌な思い出にならなかったのは、あのとき宜蘭駅で事情を察してくださった駅員さんが、親切に乗るべき電車を案内してくださったおかげです。

その後も訪れるたびに台湾に心を掴まれ続けておりましたところ、ご縁があつて日台稲門会に入会させていただきました。このたび副幹事を仰せつかりました。台湾についてはまだ知らないことばかりですが、微力ながら、日台稲門会をより一層盛り上げるお手伝いできればと思います。どうぞよろしく願います。

広谷光紗 (当会副幹事長)

WTSA早稲田大学台湾留学生会

詹凱文 (2025年度会長)



はじめまして。このたび2025年度WTSA会長を務めさせていただきますことになりました国際教養学部2年の詹凱文です。1年間、台湾留学生のためにできる限りのことを精一杯取り組んでまいりますので、どうぞよろしく願います。

まず初めに、いつも台湾からの留学生に温かいご支援をいただき、心より感謝申し上げます。皆さまのおかげで、私たちは安心して日本での学生生活を送ることができています。

4月から正式に会長を引き継ぎ、改めてWTSAがどんな組織であるべきかを考えながら、新しい体制で活動を進めています。WTSAでは、台湾から来た留学生の生活を支えるだけでなく、台湾の文化を守り、発信していくこと、そして日本やさまざまな国の文化との交流を深めていくことを目指しています。台湾出身の学生同士がつながる場をつくるだけでなく、日本の文化をもっと理解したり、台湾のことを日本の方々を知っていただけるような機会も大切にしていきます。

前会長をはじめとする先輩方のご尽力のおかげで今年度のWTSAは幹部体制が充実し、より安定的かつ積極的に活動を展開できる環境が整いました。最近では、端午節イベントや台湾茶交流会、中秋節のバーベキューなどを企画しており、台湾の伝統文化を楽しく再発見

できる場になればと考えています。また、台湾文化を伝えるだけでなく、日本社会や大学文化への理解も大切に行います。4月には神社の見学や藤の花見を行い、今後は早慶戦の観戦や冬の合宿など、日本文化に触れるイベントも予定しています。さらに、昨年度は人手不足のため参加できなかった「早稲田祭」への出店も、今年は復活を目指して準備中です。

台湾の魅力を早稲田の皆さんにももっと知っていただけるよう、しっかりと取り組んでいきます。加えて、WTSA単独での活動にとどまらず、他国出身の学生団体との連携も視野に入れております。様々な国籍の参加者を迎えたイベントの開催など、多文化交流も積極的に広げていきたいと思っています。さまざまな背景を持つ人たちと交流することは、お互いを理解し合う貴重な機会だと感じています。

一方、最近の情報社会の進化に伴って、WTSAの役割も変わってきています。以前は情報提供の中心的存在でしたが、今はSNSなどのネットメディアが発達し、新たな形で情報を届ける必要があります。WTSAとしても、SNSを上手に活用し、留学生にとって役立つ情報をもっと身近に届けていけたらと思っています。オフライン・オンライン問わず、いろんな活動を通じて、私たちが目指しているのは、早稲田台湾留学生が、台湾を再発見し、早稲田をより深く知り、日本に親しみを持ち、そして日台の交流に貢献できるようになることです。

最後になりますが、改めて日台稲門会の皆さまのご支援、そして日台の交流のための継続的なご尽力に心より感謝申し上げます。2025年度が、日台のつながりをさらに深める一年になるよう、会長として、しっかりと頑張ってまいります。今後とも変わらぬご支援をどうぞよろしく願います。

ジュディ・オングと絵画 傅馨儀



(自由時報より)

日本と台湾のメディアにおいて長年にわたり活躍されている著名人、翁倩玉(ジュディ・オング Judy Ongg)氏は、歌手・女優として国際的な舞台でも輝かしい実績を残されています。その華やかな芸能活動の裏で、彼女は画家としても芸術世界を築いておられます。芸能と美術という二つの領域にわたり活動する彼女は、筆を通して美への探求と命への深い洞察を表現し続けています。

このたび、2025年4月から5月初旬にかけて台北で開催された「維度綻放2025台湾美術院年度大展」においてジュディ・オング氏が芸術家の一人として、院士として作品を出展されました。彼女は幼少期より芸術に親しみ、若くして芸能界に足を踏み入れながらも、絵画への情熱を決して失うことはありませんでした。彼女の作品は、自然風景や花、静物などを題材とし、温かみのある色彩と繊細な構図によって、内面の静けさと命の本質へのまなざしが表現されています。その画風は、彼女の音楽や演技同様、人々の心を癒し、深い感動をもたらします。私も今回、会場で足を運び、彼女の作品を鑑賞いたしました。稲門会の皆様にもその美しい一端をお届けできればと存じます。

台湾行政院文化部の活動の公式リンク(ウェブページ)には、ジュディ・オン

グ氏が文化部長にご自身の作品について説明されている様子とご絵を写した写真が掲載されています。)

ジュディ・オング氏の芸術の世界に触れながら、自然の美しさに心癒され、ご家族やご友人と共に、涼やかで豊かな夏をお過ごしいただけますようお願い申し上げます。

傳馨儀 (Elsa Fu) (早稲田大学国際経済法博士後期課程/台湾弁護士/台湾腐敗防止委員会委員/当会前幹事)

作品および詳細は、
台湾行政院文化部の活動の公表リ
ンクQRコード(左上)とURL
(左下)を参照願います。



ジュディ・オングさん
出所：テレビ朝日
徹子の部屋

[https://www.moc.gov.tw/News_Content2.aspx?n=](https://www.moc.gov.tw/News_Content2.aspx?n=105&s=235109)

[105&s=235109](https://www.moc.gov.tw/News_Content2.aspx?n=105&s=235109)

台湾校友会総会に参加して

あいきょう こういち
相京 浩一



早稲田大学台湾校友会総会が、2024年11月16日(土)台北の台北喜來登大飯店(シェラトン・グランデ・台北ホテル)B2Fで開催されました。早稲田大学の田中愛治総長のご臨席があり、早稲田大学校友会萬代晃代表幹事も参加されました。台湾校友会：76名、早稲田大学校友会本部：11名、交流中心3名、応援部6名、台北稲門会：18名、日本各地からの稲門会：40名(世田谷、日台、徳島、行政書士、東京23区、新宿、千代田、遠洲、静岡、福岡、中野、沖繩)と多くの校友会メンバーの参加があり、総勢150名を超える盛大な会となりました。

日台稲門会からは、根本会長(総会のみ)、三村名誉会長(前夜祭のみ)、小川幹事長代行、広谷幹事夫妻、跡部会員(前夜祭と総会のみ)、相京幹事の計7名が参加しました。

呉昕陽会長が式辞で開会され、田中愛治総長のご挨拶からは、150周年記念事業の究極の目標である、

- ① 2040年までには日本で最も効果的な教育を受けられる大学、
- ② 2050年までにはアジアで最も効果的な教育を受けられる大学だと世界中の人々が思うような大学になると、決意を述べられました。校友会萬代晃代表幹事からご挨拶のあと、台湾校友会より田

中総長へ記念品の贈呈がありました。また日台稲門会根本会長から台湾校友会呉昕陽会長に記念品を贈呈しました。73歳とされる田中総長の誕生日祝いも会場の全員で行いました。

その後、台湾の大極拳選手の演武があり、早稲田大学応援部チアリーダーズによるスタンツのパフォーマンスと続きました。スタンツのトップポジションは、早稲田大学理工学部から早稲田大学理工学部大学院に進学された台湾校友会総幹事、鄭世維さんのお嬢様です。応援部リードによる応援歌メドレーと続き、校友ひとりひとりが左手を腰にあて右手を高く上げ、元氣よく校歌を3番まで斉唱しました。あらためて日本と台湾の深いつながりを感じることができ台湾校友会総会でした。

翌17日(日)は、台湾校友会娯楽活動「觀光ツアー」に参加させていただきました。台北喜來登大飯店ロビーに集合し、台湾校友会の林滄智元会長も同行いただき、台湾校友会：3名、早稲田大学校友会本部：5名、日本各地からの稲門会：22名(世田谷、日台、徳島、行政書士、東京23区、新宿、千代田、福岡)が大型バスで角板山公園に向かい、大溪老茶廟で見学した後、昼食は焼肉飯をいただきました。李梅樹記念館、三峡清水祖師廟とまわり、晚餐は台湾料理の定番、欣葉菜創始店でいただき、応援部のリードのもと校歌を歌い、前夜祭、総会、觀光ツアーと続いた日程で大いに交流を図ることができました。

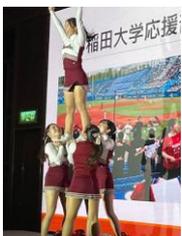
11月15日(金)台北稲門会主催の前夜祭から総会、觀光ツアーと続く3日間は、大いに交流を深めることができました。次回もぜひ、参加させていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。相京浩一 (当会幹事)



日台稲門会参加メンバー



(左上) 呉昕陽 台湾校友会会長



チエアリーダー



台湾の大極拳演武

『陳さんと勝太郎』 小川 英郎

私、小川は映画を創った。映画タイトルは原稿タイトルと同じ『陳さんと勝太郎』だ。陳さんとは陳韋辰(チェン・ウェイチエン)。映画舞台の台東區成功鎮に生まれ育つ。現在は海ぶどうを養殖している。勝太郎とは菅宮勝太郎。茨城県出身で1907年警察官として成功鎮(当時新港)に渡り、1922年には新港支庁長になった。漁港整備・道路整備を進め、新港を台湾東海岸最大の漁港に発展させた。

私と陳さんの出会いは2019年。共友から小川のLINEをゲットしたのだから、いきなりTV電話がかかってきた。「小川さん、成功鎮に来るよ、台北から台東まで飛行機で飛ばせば、迎えに行くから」と。私は友人と成功鎮に到着。初日は完全に観光。三仙台に取り残された我々はようやくなくビールを呑んでいた。二日目陳さんの自宅に招かれる。

菅宮勝太郎に係わる膨大な写真と資料・・・。「小川さん、菅宮勝太郎の映画とかアニメとかつくれなかな」私と友人は顔を見合わせ、「無理」。時は流れ、5年後、陳さんの口癖の「わけわからん情熱」(奥さんが大阪人でその影響で変な日本語、関西弁風の日本語を操る)その情熱が私にも残っていた。(私も大阪人)小川は面白い絵を撮り、あとは武蔵美出身のM・Iに完全に映画編集を任せれば、映画は完成するというシステム。それが今回の映画化の経緯だ。

そして2025年。それまでに十数回、上映会を開催していたが、陳さんから再びラインTV電話があった。「小川さん、4月、日本に行くよ。上映会と講演会100名超規模で頼みます」と。4月26日、場所は中野区役所の大イベントホール『ナカノバ』に決定。日台稱門

会・中野稱門会・東京台湾の会の皆様にご協力をいただき、120名が集まった！大成功と自負している。(この事はユニークスレーター春号に橋本氏の熱血報告がある)ところで菅宮勝太郎の功績は何かというと、冒頭の成功鎮(旧新港)のインフラ整備もあるが、最大の貢献は、地元原住民(アミ族)に対する愛情だ。菅宮家使用人の殆どは原住民だったが、彼らに高等教育を勧め、時には教育費用を菅宮自身が提供。中には校長先生、代議士になった人もいる。

最後に小川の今年後半のテーマ。①台湾は西側(台北・台中・台南)だけではない。成功鎮をはじめ『台湾東側』文化を深堀。(多くの人を成功鎮に！)

②『勝太郎』で知った、原住民及び原住民族文化をもっと知り、深く探究する。なお『陳さんと勝太郎』上映会(時々講演会付き)は今後も継続します。上映会希望の方には小川監督自らDVDを持参の上駆け付けますので、よろしく願います！

小川英郎 (東京台湾の会会長、映画監督、当会幹事長、台湾ウォッチャー)



陳さん、講演会場にて



『陳さん』(右)と小川監督(左)

秋季講演会 (2024・10・20)



講師 鈴木 武生(早稲田大学非常勤)

講師)

演題 『多言語社会台湾とその人びと』

台湾の多言語文化とその歴史的背景には、多層的な魅力があります。学生時代から台湾語に触れ、80年代に台湾を訪れた際、台湾語や客家語、さらに戦後の日本語の影響を受けたクレオール言語など、異なる音の文化に驚きを感じました。台湾語の教育者としても知られる王育徳氏への興味や、台湾語のテキストを探し求めた経験を通じて、台湾語学習の重要性を感じました。

90年代になると、牧師林道玉栄氏の台湾語教室で学びを深め、「台湾の言葉はアイデンティティの象徴である」との認識を持ちました。その後も台湾旅行ガイドのライター活動を通じ、台湾の言語と文化の豊かさに触れ続けました。2003年には、台湾原住民族であるタイヤル族の天狗村を訪問。現地の言語であるアタヤル語のフィールドワークを開

始し、そのユニークな文法構造に魅了されました。また、タイヤル語の研究により台湾の多様な言語が文化の一部として根付いていることも理解しました。台湾の言語的多様性は、中国語を基本としつつ台湾語、客家語、原住民族の言語(アウストロネシア語系)までを含むものであり、現在、教育と法整備の進展により保護されています。具体的には、2000年以降、郷土言語教育や国家言語発展法が施行され、原住民語が国家レベルで認定されました。しかし、日本語と広東語などの法整備はまだ課題が多いとされています。

台湾の街には、多言語文化の反映として看板や地名表記が見られ、観光客にもその文化が伝わるようになっていきます。台湾を訪れることで、言語とアイデンティティがどれほど密接に関わっているかを再認識する体験ができます。現在、このような背景に支えられた台湾文化は、その豊かさをさらに広げています。

鈴木武生 (早稲田大学法学部・跡見女子大学文学部非常勤講師、(株)アジアユーロ言語研究所 代表取締役)

(編集委員 記)

学術論文

『Tingu Atayal の主体移動構文における SVC 構成パターンと際立ちをめぐる予備調査』

よしむらたけし
吉村剛史さん、台湾へ

■ 巨漢記者・吉村剛史さんが

「台湾フェローシップ」に合格！

台湾の外交部は、台湾や兩岸関係などの海外の研究者が台湾の学術機関などで研究し、学術交流などを促進するのを奨励するため、それらの研究者に奨励金を出している台湾フェローシップと呼ばれている制度だ。もちろん奨励金をもらえる研究者は、応募し選考にパスした者だけだ。

2024年の総会のあとの6月某日、産経の記者として台北支局長も経た、当会の会友である吉村剛史さんから、私にメールが来た。「台湾フェローシップに応募したいので、ついでには日台稲門会の推薦状を頂戴できないか」と言うのだ。

応募には履歴書や研究計画書のほか推薦状が3通必要で、台湾に関係した学術団体や交流団体、研究者などから推薦状をもらう準備中で、残りの1通を当会からということだそう。

吉村さんの研究計画は、台湾での日本語メディア報道の変遷といったもので、台湾で期待される日本の役割を推察するといったことにもつながるようだ。とすれば、日台交流を目的の一つとする当会にとっても有意義なものといえそう。

そこで、私は根本会長ほか役員各氏にメールを送って相談したところ、推薦状を出そうということになった。

推薦状の文章は、私が台湾でいう「國語」で書き、帝京大学で教鞭をとっていた台湾人の蔡易達さんに添削をお願いして完成。それに根本会長がサインして当会か

らの推薦状が整った。

その当会からの推薦状も含めて、吉村さんが駐日代表処経由で書類を外交部に提出したところ見事合格。吉村さんは2025年1月から1年間、奨励金を受けて研究生活を送ることになった。

「巨漢記者」との別名もあるジャーナリストの吉村さんのことだから、日本やほかの国へと足を伸ばすこともしばしばだろうが、拠点は台北ということになる。

吉村さんが「台湾フェローシップ」に合格したことは、秋季講演会後の懇親会の席でもお披露目があったが、当会も関与したことなので、広く会員・会友をはじめ、ニュースレターの読者にお知らせすることにした。

また、ニュースレターには、台北で生活を始めた吉村さんからのレポートを掲載する予定だ。そして、1年間の研究を終えた際には、当会の設けた場で、その成果を話してもらいたいものだ。

(よしむらたけしジャーナリスト、外交部フェロー、元産経新聞台北支局長)
（梶山憲一 記 当会兼任顧問）



当会推薦状



吉村剛史氏



「外交部フェロー」の歓迎会で
林佳龍外交部長(右)と
吉村剛史氏(左)

台湾川柳会 30周年記念句会

えばた てっお
江畑 哲夫さん 全日本川柳協会副理事長



出所：千葉日報

2024年3月3日(日)、台湾川柳会の創立30周年記念句会が、賑々しく楽しく開催された。

会場はいつもの国王大飯店(台北市)。参加者総勢60名(日本側42名、台湾側18名)。

日本側では、小島蘭幸全日本川柳協会理事長をはじめ、江畑哲夫副理事長、隼石隆子常務理事ら、日川柳の幹部の姿もあった。岡山県からはナント20人を超える参加者がツアーを組んで来台した。

1. 台湾川柳会創立30周年記念句会の意義

①海外に於ける川柳の記念行事

台湾が日本の統治下から離れて、約80年の歳月が流れ、令和の今日でも日本の伝統文芸が詠み継がれている。

②台湾川柳会は日本の川柳界以上に高齢化

台湾の日本語世代は、大正生まれ、昭和一ケタ。台湾川柳会第二代会長李琢玉氏(2005年逝去)曰く、《どうせ、滅びゆく文芸さ。私たちの世代で終わるの

だから》。しかし、琢玉氏没後もなお、台湾川柳会の活動は活発に続いている。

③国際交流

台湾川柳会第四代表の杜青春氏の活躍は、めざましい限りだ。日本各地の川柳会を飛び回り、全日本川柳協会をはじめとする全国大会にもこまめに顔を出している。いまや、杜青春の名を知らない川柳人はいない。こうした功績が積み重なって、令和元年(2019)に全日本川柳協会より杜青春氏は特別表彰を受けた。台湾の仲間が喜び、日本の川柳人もこぞってお祝いした。

2. 台湾川柳会から学ぶこと

①会員の多彩な顔ぶれ

台湾川柳会の会員はじつに多彩である。台湾人もいれば、日本人もいる。同じ台湾人でも、日本語世代と戦後世代に分かれる。在台湾の日本人会員でも現地在住者もいれば、一時滞在の方もおられる。在日本の川柳仲間も数多く台湾川柳会の会員になっている。

②日本語と日本文化を楽しむ

川柳を通じて日本語や日本文化を楽しむという雰囲気がいっつも感じられる。日本の流行語が話題になったり、逆に台湾文化を日本人が教わることもある。最近の会報を見ても、配慮が到るところに感じられる。日台双方の読者への気遣いがふんだんに盛り込まれている。「青紅が擘圓仔(ソライナア)の冬至かな」(市川春樹)。台湾川柳会の解説は《青〓台湾最大野党中国国民党のイメージカラー、赤〓中国共産党、擘圓仔〓団子をこねる、つまり談合の比喩。台湾の総統選挙に向け、与党民進党に勝つため、共産党は親

中派の国民党に色々と戦略指導をしているらしい。読者にもわかりやすくする姿勢に驚かされるばかりである。台湾の会報は、柳論こそないが、トピックは多い。コレは？という作品には背景や解説が施される。私たちが台湾から学ぶべきことは多い。

3. 最近の動き

今年第一回台湾川柳大賽が開催された。それ以外にも選句の小冊子刊行を計画や、『跟我學日語』という日本語学習誌に選者各位の総評を掲載も計画中。旺盛な広報活動を見ると、もはや本家日本をはるかに凌駕しているように思えてくる。私たちは台湾から学ぶ必要があるのではないか？

台湾30周年は日台双方にとっての慶事であった。喜ばしいニュースはこれからも続くであろうと確信している。日台交流の絆を、双方の川柳人の力を合わせて、今後とも前に進めてゆきたいものである。

江畑 哲男 (寄稿)

(日本文藝家協会会員、日本現代詩歌文学館理事、麗澤大学オープンカレッジ講師、よみうりカルチャーセンター柏教室講師、千葉県川柳作家連盟相談役、早稲田大学国語教育学会会員、川柳学会監事。当会会員)

江畑さんの紹介

『すべての道はローバへ通ず』
(65歳以上の男女比 女6対男4、85歳以上同2対1、100歳以上同9対1。まさにローバ(老婆)帝国である……)
(樋口恵子さんの『老いの福袋』より)

大阪万博「台湾館」?…を 訪れ、思ふこと

いわがが やすひさ
岩永 康久



5月23日、26日の予定で大阪を訪れた。友人が結婚50周年パーティーをやるというので出かけた。一流ホテルで60名参加の豪華な祝宴。かかる金婚式に参加したのは後にも先にもこれが初めて。

私のサラリーマン生活は1969年大阪にてスタート。その翌年1970年に前回の大阪万博が開催された。友人の金婚式前日、私自身、傘寿の誕生日を迎えていた。人生のサンライズからサンセットを万博で迎える事に、いつの間にか懐旧の念に浸っていた。

自由時間は5月25日(日曜日)しかなく、万博の入場予約は9時枠、10時枠共にいっぱい。11時枠を取るのがやっとだった。この日の入場者数は13万7000人。相当の混雑だった。

主要国のパビリオン前には長蛇の列。予期した事だし、中小国で自由に入れる国々(連合豆館)のみ急ぎ足で訪問した。要は万博の雰囲気を楽しむに十分……しかし台湾館のみは行列に並んでも入ろうと決めていた。

会場マップを何度見ても、「台湾館」の表示は無く、案内に問い合わせた所、それは

「Tech World」ですとの事だった。

「大屋根リング」(木造)の内側には、米中欧等主要国のパビリオンが位置しており、Tech Worldは残念ながらリングの外側に。台湾の参加及び呼称は中国からの強い反対があったことは容易に想像できる。

Tech Worldに行くと見ると多くの参観希望者が列をなしており、一時間待ち。私も喜んで列に並んだ。(写真参照(下記))

この日の遊歩数が2万歩だから、その中で1時間の立ち待ち時間は老体にきつかったが、行列の横で、台湾の喜劇役者が台湾語で演じており、笑いを楽しむ事も出来た。

館内に入ると、正に「台湾」を思い出させる展示物が良く考えた配置になっていた。台湾の自然に育つモンシロチョウ、画面に触ると80メートルもある杉の木に舞い上がっていく。台湾の主力輸出品である胡蝶蘭の群生、台湾一の雄峰〓玉山の大自然パノラマ等々。

次に、台湾のハイテク産業の強い現状、先進性が視覚に訴えられ、台湾の将来への希望を抱かせる内容になっていた。

最後に、呼称 Tech World の名付け背景は???

お気付きの通り、イニシャルTWはT A I W A Nと読むことができる。工夫して難局を乗り越えて行く、台湾の逞しさにエールをおくりたいと感じた次第です。

岩永康久 (当会名誉会長)

大阪万博 Tech World (台湾館)



TSMC(台湾)熊本工場周辺見学記

わたなべ よしのり
渡邊 義典



私の本籍地である熊本の田舎へ数十年ぶりに墓参りに行き、途中でTSMCの熊本工場の周辺を巡ってきました。

熊本工場は昨年完成したばかりですから真新しく、熊本県菊陽町の農業地帯の真ん中に、白亜の、IT工場特有の、窓のない巨大な建物が威容を誇っていました。建屋の規模からすると、台南科学工業園区(サイエンスパーク)にある、TSMCの最新工場群とも引けを取らない大きさではないか?と思いました。

熊本工場は正門と建屋の壁には「Jas m」という会社名の大きなプレートがつけられていましたが、裏側(搬入入り口)には「Fab 23」というプレートがあり、これがTSMCの23番目の工場であるということがわかります。

TSMCは世界最大の半導体メーカーで、最先端のロジック半導体の製造では世界の96%のシェアを持つといわれています。科学工業園区(サイエンスパーク)は、工業団地全体が保税地区となっており、ここへの設備や資材、原材料の搬入は無税(保税)扱いとなっています。保税区内で製造された製品は大部分が直接輸出されますから、結局、保税扱いのまま一気通貫で輸入から出荷まで処理されることとなります。更に工業区内の工場には、設備投資の加速度償却が認められていますので、

手厚い産業育成策がとられています。このようなインセンティブが全くない日本でTSMCはどうやって競争力を発揮するのか?いろいろな疑問がわいてきました。TSMCの熊本工場で生産するのは世界最先端の半導体ではなく、はるか昔に開発された旧世代の半導体です。日本政府が巨額な補助金を出してまで、そんな陳腐化した旧世代の半導体工場を誘致してどうするのだ!という反対意見もかなりあったのですが、実は今、世界で最も需要が大きくて供給が間に合っていないのは、熊本工場で生産する旧世代の半導体だといわれています。付加価値の高い最先端の半導体(しかし日本では最先端半導体を使用する産業がまだ育っていない)でなくても最も需要量が大きな半導体を生産するのは意義のあることだと思えます。

完成直後のjas mの隣接地では第二工場の建設が始まっています。のみならず、周辺には半導体関連の様々な会社の工場建設がラッシュ状態です。熊本県知事は8月下旬に台湾のTSMC本社を訪問して、「第三工場も熊本に誘致したい」とトップセールスを実施しました。TSMCが熊本に工場建設を決定した要因の一つは、熊本県のこの地域の豊富な地下水が利用できることが一番大きな動機だといわれています。半導体工場は膨大な量の水を必要とします。半導体アイランドと言われる台湾では水の供給が限界となっており、これ以上の大工場の建設は難しいといわれています。TSMCの大工場が二つになったら、もともとの熊本の本メイン産業である農業や畜産業への給水に影響が出ることは必至と言われています。

TSMCの最寄り駅は、熊本と大分を結ぶ豊肥本線の無人駅、原水駅です。原水駅の一つ熊本寄りの駅が「三里木」駅です。やはり無人駅ですが、私が小学校1年(昭和22年)の遠足は、学校から一里ある行

程を三里木駅まで汽車を見に行くことでした。終戦直後の豊肥線は汽車も1日に数本しかないので、先生が汽車の到着時間から逆算して、小学1年生の足で必要とする時間を割り出して学校を出発しました。当時は運動靴などありませんから、全員が草履か裸足でした。一里歩いて駅のホームで弁当を食べ始めたたら、はるかかなたから蒸気機関車が見えてきて、私たちは「汽車だ! 汽車だ!」と興奮したことを今も鮮明に覚えています。今回懐かしい三里木駅も見えてきました。ホームは昔のままでした! 無人駅と、のどかな水田や畑、その中のTSMC白亜の巨大工場の景観はなかなかの「みもの」でした!

渡邊義典 (当会副会長)



出所: 小暮ひさのり氏



出所: リバウンドエレクトロニクス



出所: 西日本新聞 me

参考

- ・コロナウイルス 直径90ナノメートル
- ・熊本工場半導体 直径12~28ナノメートル
- ・経済効果 4兆円

日本好きが多い台湾、しかし「哈日族」は減ったのか?

かぢやま けんいち
梶山 憲一



日本台湾交流協会による『台湾における対日世論調査』の第8回の結果がこの3月末に発表された。

それによると、「台湾を除き、あなたの最も好きな国(地域)はどこですか(一つのみ)」という問いへの回答では、なんと76%の人が「日本」と答えたという。2位の「韓国」が4%だから、ダントツの1位だ。

この調査が始まって以来「日本」はずっと第1位を続けているが、それまでの最高だった前回の60%から16%も上乘せし、伸び率としては25%を超える驚くべき数字となっている。この調査が日本側によるものだとは知られていて、台湾側が日本にサービステクニクしてくれているのでは?と疑いたくなるほどだ。

「台湾に最も影響を与えている国(地域)はどこですか(一つのみ)」という問いでは「アメリカ」(48%)に1位を譲っているものの、「日本」(30%)は2位。

「海外旅行する場合、どこへ行きたいですか(一つ選択)」という問いでは「日本」が1位で68%、2位の「ヨーロッパ」が11%と、これまたダントツだ。

ありがたいことに、これほど台湾は日本へ関心を寄せてくれているのだ。

しかし一方、こんな調査結果もある。国際交流基金による海外の日本語教育の現状調査で台湾の日本語学習者数を見ると、2015年度が約22万人、18年度が約17万人、そして21年度が約14万4000人と、しだいに減っているのだ。23年に結果発表が行われた21年度の調査が現時点での最新だ。

では、「日本大好き族」などとも訳される「哈日族」はどうなのか？「哈日族」なら日本語を学ぼうとするだろう。とすれば、日本が好きといっても、「哈日族」といえるほど関心が高い台湾の人は少なくなりつつあるのではあるまいか。

台湾で日本語学習者が減っているのは、少子化が進んだことや、21年度についていえばコロナの影響や、そして英語学習へのシフトなどが原因と考えられているが、「哈日族」の減少も考えられるのだろうか？

「哈日族」という言葉の生みの親で、台湾での日本旅行のインフルエンサーである哈日杏子さんにそのあたりを聞いてみた。

——最近ではAIが便利で、観光やショッピングなら役立つ翻訳ソフトもたくさん。それに台湾には日本情報があふれていて、観光なら台湾人は日本人より詳しくいくらい。日本へ行くのが好きなそんな若い人は、日本語も現地でも実践的に覚える人も多い。何度も日本に行くというなら、ちゃんとした所で日本語を学ばなくても、じゅうぶんに楽しめるってわけ。

なるほど。いまの「哈日族」は、AI翻訳やネットの活用にかけているということだろうか。(梶山憲一 当会常任顧問)

早稲田を語る、台湾を語る、世界を語る 白井克彦元総長と面談

2024年12月10日、当会幹事会メンバーが、第15代早稲田大学総長(2002〜2010)であった白井克彦先生とお会いする機会が作られた。これに出たメンバーは、岩永康久名誉会長、渡邊義典副会長、私(梶山憲一)の3名と、面会の仲介役を務めてくれた山崎幹事であった。山崎幹事はかねてより白井元総長と面識があり、白井元総長が台湾との縁も深いことから当会幹事との面会を提案、上記3名がこれに応じたものである。根本宏見会長も出席の意向であったが、仕事のため不参加となった。

同席した当会の3名のうち、岩永名誉会長と渡邊副会長とは、以前にも白井元総長と面会のほか浅からぬ縁もあり、初対面は私ひとりであった。

さて、この面談の場所は、赤坂・日枝神社近くのビルにある「永楽倶楽部」。

大正4年に早稲田大学の校友会倶楽部として大隈重信侯により設立されたもので、現在は開かれて他大学出身者も3割ほどはいるが、100年を超える歴史をもつ日本有数のメンバーズクラブという。そして倶楽部の現会長が白井元総長である。

その永楽倶楽部の一室に上記の5名が集うと、名刺交換のあと、すぐさま談笑が始まった。岩永名誉会長が「お元氣そうですね」と、白井元総長に声をかけると、「そうでもないよ」と応じられた。白井元総長は1939年生まれの現在85歳。

「そうでもないよ」とは正直な思いかもしれない。自身の70歳代と較べれば、老いを感じてもおられるだろう。しかし、一般の85歳と較べれば、「お元氣そう」としか言いようがない。頭脳は明晰で回転も速く、頭脳の劣化が始まりつつある71歳の私などは、びっくりするしかない。5人の談話は、白井総長の誘いで、母校で鞭

をとることになった岩永名誉会長が話題を出し、白井元総長がそれに応え、また渡邊副会長が意見を述べ、口下手な私が時折なんとか話すというさまで進み、いちはん年少の山崎幹事は話すのを控えているようだったが、話が少し滞ると口を開いて交通整理をしてくれるのだった。

話題は、白井、岩永、渡邊の三氏ともがご存じの呉東進氏(早大商卒/新光グループの核心・「新光金融控股」前理事長)など台湾の財界人についての思い出、早稲田大学に関する話題(東京女子医大と早大との連携を進めている研究など)、はたまた移民問題や、中東や西アジア、またウクライナ戦争などの国際情勢と、広く語り合った。話題が広いだけに深く掘り下げた議論ではなかったが、どういう視座から世界を見るかという点では、示唆に富む話はいくつもあったように思う。白井元総長のような方との意見交換は、当会の今後を展望してゆくうえでは、必ず益するところがあるものと思う。気がつけば、あつという間の1時間半。永楽倶楽部の出すバランスの取れた昼食を食べながらのことだった。

そして、そのあとは、かつて雄弁会だった山崎幹事の音頭取りで、校歌を3番まで白井元総長ほか全員で斉唱。校歌を「第二の国歌」と呼ぶ山崎幹事ほどの思いの強さは私にはないが、「かがやくわれらが行手を見よや」との思いは一にしている。

梶山憲一 (当会常任顧問)



永楽倶楽部にて
白井元総長を囲んで

右から
岩永名誉会長、白井元総長、
渡邊副会長、梶山常任顧問

台湾紹介

■最近の経済ニュース(劉彦甫)



出所 東洋経済新報社

劉彦甫さん(WTSA出身で現在東洋経済新報社記者)の署名記事を紹介します。経済から国際情勢まで非常に詳しく解説しています。是非ともご覧ください。

詳細は、左記サイトを参照してください。

<https://toyokeizai.net/ist/author/%E5%B5%8A%E6%89%96%E5%BD%A6%E7%96%96%A6>



劉彦甫 (当会幹事)

■台湾野球の国際大会「プレミア12」で優勝

11月24日、野球の国際大会「プレミア12」で台湾が4対0で日本を下し優勝したが、台湾凱旋後の26日、市民がパレードで台湾尚勇（タイワンシャヨン）を歌いながら熱狂した。YouTubeで台湾尚勇（左記）を見てみると、だんだん熱くなってくるから楽しい。青森のねぶた祭りの跳人（はねと）をみていると自分も踊りたくなる、そんな感じだった。

日本で派手なビールかけを辞退した配慮が、日本人に好印象を与えたためか、（日本が）負けて悔しいという気持ちがお不思議と起きない。次は、WBC優勝か。頑張っただけ。ただし、台湾が優勝ということは、日本が優勝できないことだから、ちよつと複雑……。

<https://music.youtube.com/watch?v=3lw9tgQYqWM>

(♫)王者(ワンツー)台湾 台湾尚勇(シヤンヨン) (♫)
 吼(ホ) 吼吼吼 吼吼吼吼
 HEROー HITー 安打! (選手名)
 HEROー HITー 安打! (選手名)

<https://www.youtube.com/watch?v=3lw9tgQYqWM>

もともと米ヤンキーズの球団歌だった『私を野球につれてって(Take Me Out to the Ball Game)』が今やMBL全球団のファンが歌うように、もともと統一の球団歌だった『台湾尚勇』は今や台湾野球の対外試合での愛唱歌になった。

2024年は、春の六大学野球で早稲田が3年ぶりに優勝、秋には台湾が「プレミア12」で優勝と、Vが二つ(W)の年でした。



台湾、初優勝

秋の歓喜 2024年 (出所：スポニチ)



早大7季ぶり優勝

喜びの春 2024年 (出所：東京新聞)

ゆまかわむつみ
 ■雪川睦美さん(台湾エンタメ迷)の おすすめの台湾映画

★『鬼才之道』

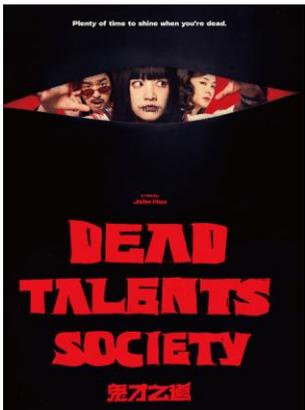
この作品の監督は『返校 言葉が消えた日(原題：返校)』を製作したジョン・スー(徐漢強) 監督です。

『返校 言葉が消えた日』はしっかりとしたホラーですが、『鬼才之道』は幽霊界を舞台にしたコメディになります。

近年の台湾ホラー映画ブームをパロディにしたシーンもあり、楽しみな作品ではあります。

台湾映画界の才華が大きく花開くであろうと個人的に楽しみに感じております。

<https://natalie.mu/eiga/news/615783>



出所：©Activator Co., Ltd.

★『オールド・フォックス 11歳の選択』

本作は、台湾バブル期を背景に「家を買いたい少年」と周りを取り巻く大人たちの物語。バブル期の中「勝ち組」となったジャヤと「良い人」であるがために取り残されてしまうリャオジエの父タイライ、その

二人を見つめる少年ジエの揺らぎが絶妙なバランスで描かれています。また少年に自分を重ね合わせるシャの一種悪魔的に感じられる感情の中に宿る一抹の孤独感も見ものでした。果たしてジエがどういう未来を選択するのかはぜひ作品でご確認いただきたいです。

作中ではいくつかのエピソードが散見されます(実際に起きた「鴻源案*」をモデルにした事件も描かれています)。それぞれにはつきり結論が出るわけではなく、消化不良に感じる方もいるかもしれないですが、私にはそれが「台湾映画らしさ」に感じられ、心地よい後味を味わえました。

*鴻源案

1981年、沈長勝、劉鉄秋、于永明らは投資会社を名目に宏源投資を設立したが、これは実際には、ねずみ講であった。彼らは魅力的な高金利を提示し、1000億台湾ドル近くの民間資金を違法に調達した。そして宏源は1990年に突如破綻し、16万人の債権者と900億台湾ドルを超える負債を残し、台湾の金融システムを一時混乱させた。(維基百科より)

<https://www.toei-video.co.jp/special/oldfox11/>



出所：東映ビデオ(株)

★日台合作映画
『青春18×2 君へと続く道』



出所：映画.com

<https://eiga.com/movie/100426/photo/>

本作の監督は日本人（藤井道人）ですが、おじい様が台南の方だそうで、19年前のシーンは台南を舞台としています。19年前の時代がいつ頃かははっきりと分かりませんが、私自身が高雄に語学留学していた時期の少し前かなと思われれます。五月天やモー娘。、スラムダンクなど、当時の台湾の若者文化が映画の中であふれており、とても懐かしく感じました。ほかに映画館やカラオケ店など懐かしいポイントは数多くあるのですが、すべて語ると長くなりそうなので割愛いたします。本作は俳優陣も豪華ながら、何よりもシユ・グアンハン（許光漢）の演技分けが素晴らしいかっと思えます。特に日本語のしゃべり方。スラムダンクが好きで覚えた、18歳のたどたどしく少し照れも入った日本語の話し方と、仕事で日本とも取引がある36歳の社会人の男性としての日本語の話し方。観終わった後によくよく考えると外国語の話し方の演技分けは非常に難しいことに気づかされました。ぜひ彼の演技力にも注目して観ていただきたい作品です。

■大久保利通と台湾

はしもと としあき
橋本 紀明

最近、詩吟に凝っている。昔からやってきたのではなく、台湾時代、早慶講演会で李登輝総統（当時）の講演会を企画したが、あいにく李総統は海外出張後、風邪をひいてしまい、台北稲門会の幹事だった北村友雄さん（故人）が代読、私が記録係をした。代読した内容が、出版前の『台湾の主張』の一部で非常に刺激的な内容だったため、原稿を渡された北村さんは読んでいいものかと悩んだとか。（この箇所は、日本語版『台湾の主張』では削除されている。）

記録していた私も同感だった。そんな縁で、日本に帰ってきた後も、北村さんとは仲良くしていた。その北村さんが詩吟をやっているというのを聞いて、私も少し学ぼうかとして始めたものである。詩吟といっても、題目は、中国関係では唐代が中心。日本関係では牛若丸から室町前の楠正成、そして江戸末期から明治期の日露戦争が多いが、台湾時代、華語を勉強していたことが、意外にも今、役立っている。高校の時は、漢文は面白くないなあと思っていたが、今は漢文がそのままですーと頭の中に入ってくるのである。これが台湾駐在の成果かもしれない。ちよつと前に、NHKで『坂の上の雲』が再放送されていたが、今回は二十数回全部観た。詩吟でおなじみの乃木希典の『金州城』や『爾靈山』もしっかり放送されていた。

皇居周辺には楠正成像や和氣清麻呂像が設置されているが、これらは大久保利通の意志がつよく反映されていると聞いた。どちらも天皇制の継続に貢献した人物であることなによりも大久保利通は感じていたからようだ。大久保利通には台湾関係の詩がある。1871年宮古島住民が琉球政府に年貢を納めに行った帰りに遭難して、台湾の双溪口（屏東県恒春鎮）に着いたが、パイワン族によって54名が虐殺された（生存者12名）。これを清に抗議したが、清は、『台湾は化外の地である（自分たちには関係ない）』という回答をしたため、3年後に日本は台湾に派兵した。その時、大久保利通はリーダーだった。台湾派遣時に大久保は『台湾陣中の作（または亀山陣中の作）』を作った。

あることをなによりも大久保利通は感じていたからようだ。大久保利通には台湾関係の詩がある。1871年宮古島住民が琉球政府に年貢を納めに行った帰りに遭難して、台湾の双溪口（屏東県恒春鎮）に着いたが、パイワン族によって54名が虐殺された（生存者12名）。これを清に抗議したが、清は、『台湾は化外の地である（自分たちには関係ない）』という回答をしたため、3年後に日本は台湾に派兵した。その時、大久保利通はリーダーだった。台湾派遣時に大久保は『台湾陣中の作（または亀山陣中の作）』を作った。

大海波鳴って 月宮を照らす

誰か知らん 万里 遠征の情

孤眠未だ結ばず 家に還るの夢

還るかに聴く 中宵 喇叭の声

戦いの前の大久保の不安がわかる。そして平定後、清との交渉後に作ったのが、『通州を下る偶成』である。

勅を奉じて単航 北京に向う。

黒煙 堆裏 波を蹴って行く。

和成りて 忽ち下る通州の水。

蓬窗に 閑臥して 夢 自ら平らかなり。

交渉の結果、清に台湾出兵が合法であると認めさせ、見舞金10万両（テール）と

台湾に設置した施設代として40万両を受け取った。後者の詩に大久保の安心感がわかる。

当時、台湾の一部は、現インド・アンダマン諸島の北センチネル島のように外部との接触を一切断ち、政府すら入れない地域だったのかもしれない。

琉球王国は、この事件後の1879年に消滅し、正式に日本に併合され沖縄県となる。この宮古島島民遭難事件が、この日清戦争（1894）の遠因となったこともなんとなくわかる。

■オーナーシステム

日本で学んでいる留学生が、一般人登山解禁前の4月22日に富士山に一人で登ったが、高山病で山岳救助隊により救助された。しかし4日前に山に残したスマホなどが借しくなり、再度一人で登ったが、またしても遭難してしまい、救助された。このニュースをみて、オーナーシステム（honor system）という言葉思い出した。自由を享受する人は、監視がなくて社会の常識を守らなければならないという暗黙のルールであるが、日本社会もこのオーナーシステムで成り立っていると思う。1993年にオーストラリアのパスに行った時、市内電車の改札口には駅員がいなかった。乗車客は使った乗車券を自主的に備え付けのボックスに入ればよかった。まさにオーナーシステムであった。ただ私は、こんなことをしたら無銭乗車が絶対起きると思った。2020年頃、偶然テレビを見ていたら、そのパス市内電車がとりあげられていた。うっかり寝過ごした場合でも5万円の罰金を取る・・と。実際、実行しているかどうかは分からないが、善意を無視すると許

さないよというパース市の強い意志は感じられた。フランスのモンブランでは、登山する場合、1万5千ユーロ(250万円)を当局に預けなければ登れないとか。ただし、無事下山したら返金される。これもただ乗り(登り)はダメというオーナーシステムかも

富士山では無謀留学生の救出二回で1200万円の費用が発生した。1回目はしかたないとしても2回目は実費を請求すべきであると思う。

実は、私も20代から30代初めにかけて、仲間と毎年6月にスキーを背負って富士山に登り、滑り下りることを楽しんでたのだが、初めての年、新大久保にあった石井スポーツで「来週富士山に登るのだが、運動シューズでよいか」と聞いたら、店員から「それだとあなた、死にますよ。富士山は日本で一番登山が難しい山だから」とまじめに言われた。たしかに、スキーで下りる時、雪原に人間の頭ほどの石がごろごろしていて、うっかり転んだら大げがすと思った。そのため、時間をかけて慎重に下りた。

翌年(まさに4月に)友人は一人で登ったらアイスバーンで滑り落ち、救助員にこっぴどく叱られたと彼は話してくれた。幸い軽い怪我だけで済んだが・・・子供の頃、山で遭難すると家が破産すると聞いたことがあった。当時、救助費用は遭難者負担だったかも。今は公費。モンブランとまでは言わないが、7〜8月以外の登山は、100万円くらいのデポジットが必要だと思う。6月3日夜、台湾の七十代と五十代の3人が、福島の燧ヶ岳(ひうちがたけ)で遭難とのニュースが入った。無事でよかったが、今回は、救助にいくらかかったか。橋本紀明(当会幹事)

金美齢さん、8月『話の肖像画』に登場

2021年の産経新聞『話の肖像画』に台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表(当時)が登場したことがあったが、2024年8月には、日台稲門会幹事もいろいろお世話になった金美齢さんが登場した。陳水扁総統時の2000年に中華民国総統府国策顧問になったが、嫌がらせの弾丸入り封書が送られてきた。そのときに、「ビビっていたら女がすたる」として『ありがたくいただきますよ』と言った。話の肖像画には、そんなことも書かれていた。まさに信念の人である。

話の肖像画の内容は、『日本よ、台湾よ』(周英明・金美齢著)にも載っているが、台湾民主主義を陰でささえた夫、周英明さんの苦勞もひしひしと感ずることができた。(編集委員 記)



日台稲門会懇親会で



(2001年1月 扶桑社)

台北愛楽コンサート

2年前、台湾の双十節に招かれた京都都府高校吹奏部が、総統府前で演奏行進した。その成功がきっかけになり、日台での音楽交流が従来以上に繰り広げられるようになった。昨年(24年)は、台湾の建国高校マーチングバンドが来日し、早稲田大学、東海大学などの応援部、吹奏楽部、チアリーディング部と交流を行った。

今月(6月)三台会(慶応)の朝枝さんから台北愛楽コンサートのチケットをいただいた。

2025年6月3日(火)は大雨だったにもかかわらず、たくさんの方が、会場(晴海の第一生命ホール)に集まっていた。台湾フブソディー(游家輔作曲)で幕が上がった。厳肅な雰囲気の中でプッチーニの『栄光のミサ』グロリアが合唱され、聴き入った。後半は、『マダガオ狂想曲』、『四季紅』など台湾の風景が頭に思い浮かぶような曲がながれ、最後は懐かしい『夜来香』、『川の流れるように』・・・と続いた。

(編集委員 記)



開演前の会場風景



パンフレット

幹事会より

■新入会員紹介(入会順、敬称略)

広谷 光紗 (入会担当、副幹事長)

令和6年度の入会者を報告いたします。
入会順(敬称略)

辻本英一、増井孝史、松尾絵理香、中村明弘、遊佐謙太郎、山本幸男、吉村剛史、多田恵、稲葉元和、鹿倉村隆康、中村英司 計11人

■今年度会費納付のお願い

川村 淳一(会計担当、副事務局長)

日頃日台稲門会の活動にご理解ご協力をお願いいただき、ありがとうございます。
2025年度の年会費(5千円)も原則として、日台稲門会の左記のいずれかの銀行口座にお振込みをお願いいたします。今年度も、会の活動を積極的に展開してゆく所存ですので、皆様方のご協力をお願いいたします。

◎みずほ銀行宛て振り込みの場合
みずほ銀行 六本木支店(店番053)
口座番号:普通預金 4448937
口座名義:日台稲門会(ニッタイトウモンカイ)

◎郵便局宛て振り込みの場合
加入者名：日台稲門会
口座番号：0013018166805

郵便局の場合は、通信欄にもお名前の明記をお願いいたします。
誠に恐縮ですが、振込手数料はお振込みされる方のご負担にてお願いいたします。

ご不明の場合は、左記までお問合せください。

junchi.kawamura.dir@gmail.com

■ Facebookグループ 「日台稲門会」利用のお勧め

にしもと まこと
西本 誠 (事務局長)

※グループURL

<https://www.facebook.com/groups/nitai.tounon>

日台稲門会では、情報発信ツールとしての下記「サイト」に加えて、幹事有志を「管理人」とした「Webサロン」として、Facebookグループ「日台稲門会」を運用中です。日台稲門会関係者(会員・会友・OBなど)の交流を目的としておりますので、会員・会友の皆様によるご投稿をお待ちいたします！

※公式HP

<https://nitai-tounonkai.com/>

※FBページ

<https://www.facebook.com/nitaitounonkai>

日台稲門会グループ



公式HP



FB ページ



■ 訃報

日台稲門会を陰で支えてくれたお二人が亡くなられました。

★黄文雄さん



元日台稲門会会員で、日台稲門会でも大隈会館で講演してくださった黄文雄さんが2024年7月21日に亡くなられました。享年85才。

「覇権主義を続ける中国をきびしく批判する一方で、台湾を近代化に導いた日本を高く評価し、日本の文化・文明に心酔、戦後の自虐史観を払拭する言論活動を行った」(黄文雄事務所発表)。ご冥福をお祈りいたします。

★齋藤征二さん



ニュースレターや会報に毎回寄稿いただいた台湾在住の齋藤征二さんが2024年8月16日に亡くなられました。享年84才。ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

日本の外交方針(覚悟)が変わったのかなと感じる。昔は台湾の人が入国する場合、パスポートにはなく、別紙に日本国印を押しした。2004年には李登輝元総統に旅行ビザ発行を拒否した。また2011年の東日本大震災後の式典で最大支援国だった台湾の代表を一般席に座らせる等々。とにかく、日本は台湾に対して(本心はともかく、みかけ上は)強気だった。台湾の友人から理由を聞かれた時、「日本は、本言は台湾が好きなのだが、表向きに好きというとは妻(?)に怒られるから、台湾に対してにべもないそぶりをしてるのだ」と言った。しかし、さすがに日本人自身も台湾に対するこの扱いは少しおかしいと最近では、思うようになってきた。

変化のきっかけは、東京オリンピック入場行進時、NHKが「台湾です」としつかり発言をしたあたりからか。一、二年程前もオーストラリア、東欧北欧諸国がこぞって台湾詣をし、最後は、米下院議長までも訪台した。日本は、世界も正論を出し始めたと感じたのだろう。そして過度の配慮は日本の為ならずと思った。今年(法務省は)省令改正で戸籍国籍欄に「台湾」と書くようにし、広島市でも今年8月の平和記念式典に台湾を正式に招待することとした。さらに自衛隊統合幕僚長(制服組トップ)を務めた岩崎茂氏が台湾の行政院政策顧問に就任した。昔だったらありえないことだった。ただそれもこれも、こちらが腫れものにさわるように気を遣えば遣うほど、相手はさらに強気(横柄)になったことへの反動だと思う。逆にじつと我慢してきた台湾が、判官びいきの日本人を惹きつけてしまった。(風)